



活動報告

【大学グループと TOPIX 社長会のパートナーシッププラットフォーム企画第1弾】 昭和女子大学と 30% Club Japan 共催のシンポジウム実施 「トップマネジメントと語ろう、グローバル時代のビジネス・キャリア」

2024年11月27日に昭和女子大学のグローバルビジネス学部及び30% Club Japanの共催で、「トップマネジメントと語ろう、グローバル時代のビジネス・キャリア」というテーマで第1部ではシンポジウム、第2部では分科会が開催され、昭和女子大学の学生及び30% Club Japanに加盟する大学の学生が参加しました。

女性リーダーの育成にむけた協働

同シンポジウムでは、女性幹部の育成の課題を「経験」「意識」「環境」から考えると題して、大学と企業のトップがパネルディスカッションを行いました。



シンポジウムには、30% Club Japanのメンバー大学及びメンバー企業である、右から坂東眞理子・昭和女子大学総長、曄道佳明・上智大学学長、藤井輝夫・東京大学総長、宮本洋一・清水建設株式会社代表取締役会長、田代桂子・株式会社大和証券グループ本社取締役兼執行役副社長が登壇し、30% Club Japanのアドバイザリー・ボードメンバーの塚原月子・株式会社カレイドリスト代表取締役がモデレーターを務めました。

シンポジウムの冒頭では、トップマネジメントになるまでの各自の経験が語られました。組織において、仕事を進めていく中で多方面の関わる人たちの異なる意見をまとめることを早い段階から経験することがマネジメントとしての手腕を磨いたという体験などが紹介され、今の時代は女性であっても男性と同じように経験を積み、登用されるチャンスはあると各トップから力強く語られました。

次に、女性のより良いキャリア形成の前に立ちほだかる本質的な課題に関する議論では、男女共にある根強い性別役割分担意識や、アンコンシャス・バイアスを個人レベルでも組織レベルでも変えていくことと共に、キャリア形成において大学卒業後に就職というルートだけでなく、その後のステージに合わせて柔軟に起業、大学院で学び直す、NPOや企業に移るなど、キャリアルートの社会通念の構造的な課題を変えていくことの必要性が議論されました。



最後に大学と企業が将来の女性人材育成の観点から連携すべきこととして、大学側からは短期のインターンシップを超えて、大学での学びを活かし、企業と長期的に人材を育てる、コーポラティブ・エデュケーションの仕組みの導入や企業と大学で新しい教育プログラムを一緒に開発するプラットフォームの産学共同開発なども提言されました。

さらに、組織で働く女性を念頭において、採用後には企業に対して女性を3つの「き（期待、鍛える、機会付与）」の観点から育成することの必要性や、また女性自身も自ら手を挙げて、会社に貢献する自信を身に付けてほしいとの意見も語られました。

30% Club Japan が重視する「統合的アプローチ」の一環として大学と企業が連携することで、社会の意思決定層への女性参画を促していくという観点からも意義ある議論が行われました。

企業や大学のトップ・管理職層と大学生の対話

第2部は、学生たちが直接トップマネジメントと対話する機会を設けるために少人数の3つの分科会に分かれた形式で行われました。分科会のテーマ①は「リーダー育成と無意識のバイアス」、テーマ②は「女性参加」は手段か？目的か？女性の参画を実現するために数値目標は必

要か」、テーマ③は「企業からみた大学教育への期待」で行われました。第一部の登壇者がペアとなって各分科会を巡回し、モデレーター進行の元、学生たちの質疑応答にコメントしました。

第1分科会では、白川香名・大和証券グループ専務執行役 CH0、大門小百合・昭和女子大学ビジネスデザイン学科客員教授、第2分科会では、原田郁子・日本電気株式会社ピープル&カルチャー部門エンプロイヤーリレーション統括部長、林香里・東京大学理事・副学長、第3分科会では、西岡真帆・清水建設株式会社コーポレート企画室 DE&I 推進部長、今井章子・昭和女子大学グローバルビジネス学部長・教授がモデレーターを務めました。

学生たちからは第1部のシンポジウムを受けて、研究分野で女性がライフイベントを経てもキャリアを続けていける方法や、女性が学生でも社会人でも味わうアンコンシャス・バイアスの背景、現在の多様性が少ない公教育の壁、就職活動における自身のあり方、自分らしい個性の見つけ方等、様々な若い学生視点の様々な疑問や意見を積極的に議論する機会になりました。

大学生たちが普段は接する機会を得難いであろう企業や大学のトップ、企業の現場で活躍するシニア管理職女性たちからの視点に触れて、本当のところ大人達は学生たちに何を期待しているのかを聞くことができ、勇気づけられた貴重な機会であったのではないのでしょうか。

同シンポジウムの詳細は、朝日新聞採録記事のデジタル版でもご確認いただけます。

<https://www.asahi.com/ads/swu2024/>

以 上